書評　『「環境を守る」とはどういうことか』岩波ブックレット、二〇一六年

島崎　隆

本書は全体として、比較的若手の研究者の手になる環境思想入門のための論文集である。全体として、体系的なまとまりはないようだが、大上段に振りかぶって、環境問題を論ずるのではなくて、身近なテーマや話題から環境問題を見直していくという姿勢が見られる。以上の意味で、こうしたブックレット形式は、親しみやすいものといえよう。環境系の雑誌やテーマは最近多いが、事実認識の、または環境政策的な記事や論説が多いように見られる。地球温暖化問題など、環境問題が焦眉の現実的課題となっているなか、哲学的・倫理学的な方向での展開はかならずしも多くはないようである。

本書は、環境問題の事実を念頭に置きながらも、そのなかで環境思想的なテーマを扱っており、一味違う内容となっている。環境問題はたしかに焦眉の課題ではあるが、あせって何か直接的に取り組めばいいかというと、そこに意外と複雑な因果関係、利害の対立状況、自然観や価値観的・思想的な立場の多様性、問題の現実的広がりなど、単なる科学的な事実認識では割り切れない側面が見えてくる。この意味で、哲学的・倫理学的に、かつ認識論的に一度深く考えないと、課題に取り組みづらい状況も出てくる。その意味で本書は、環境思想や環境倫理といわれる分野をやさしく解説するという点で、タイムリーな企画となっている。おそらくこのブックレットを手に取ろうとする人は、マスコミ等を通じて環境問題に強い関心をもってはいるが、もう少し基本的・原理的なところから、あらためて考えてみたいという人ではないだろうか。

尾関周二氏による序論「『環境思想』とは何か」によれば、環境思想・教育研究会は二〇〇五年に発足して、いまに至っている。本書の執筆者は、この研究会に所属している人々である。さて氏は、各論にはいる前に、ベースとなる大きなテーマについて述べる。環境思想（環境倫理を含む）が個々の専門的な問題よりも、全体的なつながりや相互依存関係を重視すると説明され、グローバルに、核戦争の脅威、地球温暖化などの環境問題、衣食住（とくに食）、格差、人口爆発の問題が重要なものとして列挙される。また総体的に、氏によれば、《近代》批判が、そして脱近代の思想がここで求められるのである。さらにまた、環境思想では、事実の認識だけでなく、価値評価の問題もまた重要となる。また「あとがき」（尾崎寛直氏）でも、学問の細分化のなかで、「環境を守る」という大きな問いを立てるべきだといわれる。

本書は全部で六章立てであり、以下、各論を順に、簡単に紹介・検討したい。

第一章「『環境』とは何か」（上柿崇英氏）は、本書全体の序論的役割をしているようだ。そもそも環境問題における「環境」とは何だろうか。氏によれば、環境とは、人間にとってなど、つねに何ものかにとっての世界であり、動物のムササビにとっては、「ハビタット」（広義の暮らしの場所）とされる森林が環境であり、滑空する場所なしには、ムササビという生物の現実は成り立たないのである。さて、人間にとっての環境は、「自然環境」と「社会環境」と二つに区分され、後者は道具、構造物などの物質的部分と言語、文化、社会制度、世界観などの非物質的部分に区分されるという。そこで肝要なことは、自然環境、社会環境、人間という三つの要素の関係性を認識することであり、直接に自然が汚染されるとしても、つねにそこに、人間が一定の社会制度、社会環境のなかでその環境問題を発生させるという考え方である。これはつねに社会のあり方とのつながりで、環境問題を考えるべきだということであろう。これはさらに具体的には、カブトムシという自然物を里山のあり方から考えたり（第四章）、原発問題を環境正義という社会的問題との関係で考えたりという姿勢（第五章）につながるだろう。いずれにせよ、第一章は大きな意味で、環境問題の基本的枠組みを提示したといえよう。

第二章「環境問題を『道徳的に考えること』を考える」（熊坂元大氏）は、少し抽象的に、環境問題について価値の観点から考える。具体的には、自然物には、人間にとって利用されるという意味での「道具的価値」しかないのか、それとも、それ自身のもつ「内在的価値」や「権利」があるのだろうかという問題である。つまり、そもそも動物には、人間同様の生きる権利などがあるのかという問題でもある。著者はあまり明快な結論を出していないようだが、「自然の内在的価値」の承認は、おのずと非人間中心主義、つまり自然中心主義の立場につながるとされるが、これは当然の結論であろう。ここでは、さらに道徳的なアプローチがなされて、環境保護のために人間が何をなすべきかではなくて、環境問題との関わりで、私たちはどのような存在であるべきか、と問われるという。著者はこれに明快に答えていないようだが、重要な問題なので、のちほど考えたい。

第三章「野生の『クジラ』と人間の『鯨』」（関陽子氏）は、クジラやイルカを例に出して、人間にとってのそれらの「道具的価値」から「自然の内在的な価値」への転換の現象を考慮に入れながら、だがそれでも、生命を利用しないと人間は生きていけないという事実に目を向ける。本章は前章の続きの議論といえよう。ここで、環境問題の展望のため

に尊重されるべきは、クジラなどの生命の普遍的な価値（内在的価値）なのか、それとも人間世界の地域や文化に見られる人間的価値なのかと問われる。これこそ重大な問題であるが、氏は両者を統合しようとして、「人間－自然共生主義」を説き、さらにそれを前提にした「批判的人間中心主義」を主張する。「人間－自然共生主義」とはいいネーミングであると思うが、いずれにせよ、「人間と自然の共生」が環境問題におけるひとつのキーワードとなるであろう。

第四章「カブトムシから考える里山と物質循環」（大倉茂氏）は、カブトムシがいつのまにか商品化されている事実から、カブトムシが住む里山が破壊され、そこでの物質循環に亀裂がはいっていることを指摘する。つまりここで、《奥山－里山－里》という全体の調和が破壊されてきているのである。また商品化といえば、すでに人間の労働力も自然とともに商品化されているのだと指摘される。農業で自給自足の部分がふえれば、脱商品化はある程度可能となるだろうが、評者によれば、この問題を解決するには、商品貨幣経済の全面化である資本主義社会をどうするのかという大問題があるということを指摘しておきたい。いまや、社会主義者でなくても、資本主義の終焉が指摘される時代である（水野和夫氏ら）。著者はまた、「自然の社会化」という現象に、「労働による自然の社会化」と「文化による自然の社会化」の二つがあると指摘するが、これは有益な指摘であろう。後者は、たとえば、文化的産物としての星座の形成などである。

第五章「原発公害を繰り返さぬために」（澤佳成氏）は、「環境正義」の観点から、土壌汚染問題や原発公害の問題が指摘される。正義（何が正しいか）とは、一種の価値の問題であり、環境正義の問題は、環境倫理における有効な観点である。氏は米国での公害の歴史に触れ、有害廃棄物の投棄がアフリカ系アメリカ人の居住地域に集中しており、環境問題の観点からして、正当性が確保されていないとされるのである。またこれは同時に、「環境レイシズム」という差別の問題ともなる。さらに、原発労働者の格差問題も存在し、米国でのウラン採掘がナバホ族の危険な労働によって担われているという事実にも言及される。日本での原発再稼働は、遠く米国のウラン採掘の問題にもつながるのである。最後に、「真の文明は　山を荒らさず　川を荒らさず　村を破らず　人を殺さざるべし」という田中正造の名言が引かれる。

第六章「私たちの『環境』について改めて考えてみる」（布施元氏）は、本書の最後を飾るのにふさわしい展開となっている。とくにここで、一九八七年に国連のブルントラント委員会で確立された「持続可能な発展 sustainable development」という考えに触れら

れる。それはおおむね、将来世代の必要を損なうことなく、現在世代の必要を満たすための発展のことを意味する。ここでは幅広く、①現在世代での人間相互の関係、②人間と自然の関係、③現在世代と将来世代の関係という三つの要素の調和が求められるべきとされる。とくに本書では、①と関わって、フェアトレードにも言及される。さらにまた、第一章と同様に、自然環境と社会環境の不可分性が確認される。ところで興味深いのは、「環境的発想」（私を除くすべて）と対比させて、「宇宙的発想」（私を含むすべて）が提起されることである。そしてたしかに、宇宙的発想によって環境問題を考えることもまた、必要なことである。

さて以上のように、本書は工夫された内容で展開されているが、二点気になったことがあるので、それを最後に述べたい。

第一は、「環境を守る」という発想と関わることでもあり、第二章で提起された問題でもある。評者のいいたいことは端的であって、「自然環境を守る」というまえに、実は人類は、長い進化の過程のなかで、酸素の発生を初め、生命などの外的自然によって守られており、自然のおかげでようやく生きているのではないかということである。食べることも生命を頂くということであり、そうした自然がなければ人類は生きていけない。その点で、まず自然に感謝し、そのうえで、「自然を守る」ということも正当に位置づけられるのではないかということである。自然を破壊しているのは、人類自身である。

第二は、「内在的価値」など、環境倫理学における価値のテーマについてである。また、「環境正義」といわれるさいの「正義」もひとつの価値観であろう。これらは、物理学的性質などの客観的な事実的認識とは異なり、自然科学的な探究で発見されるものではない。こうした区分の指摘がまず大事ではないだろうか。そして価値とは、まず何らかの価値を担う主体が存在して、無意識的にせよ、その主体がある価値を対象に付与する結果として生ずるものではないだろうか。そう考えると、「内在的価値」という表現は、それが事物に内在する客観的性質ではない以上、何か矛盾をはらむようにも見えないこともない。このあたりはむずかしい学問的問題が絡むこととなるが、この問題に一定の展望をもったのちに、さらにわかりやすく表現することが求められると思われる。

いずれにせよ、以上のように、環境思想や環境倫理的発想がどういうものかが親しみやすい形で明らかになったと思われる。それは堅苦しいものではないし、必要なものでもある。本書は、気軽に手に取ってもらえるものとして、とくに若い方々にお薦めしたい。